

第4分科会 「小規模校の教育」

ふるさとにひたり、ふるさとに学ぶ総合学習

高知県教組・高知県民主教育研究所
高尾和伸（小学校）

春、子どもたちと学びをつくる！

<自信がない子どもたち>

校区の中心を四万十川がゆったりと流れ、自然豊かな環境の中にある。しかし、学力テスト体制は、容赦なく学校に迫ってくる。アンケート調査では、常に自尊感情の低さと自信のなさが目立った。また「ここには何にもないから好きではない」と答えていた。

そこで、地域の中に本気で飛び出そうと思い、川あそびやうなぎとり、川下りなど子どもたちと一緒に計画を立てた。

<北ノ川小学校の様子>

四万十町は、高知県の西南部にあり、四万十川の中流域に位置している。東は太平洋に面し、北西部は愛媛県との境に接している。2006年に高岡郡窪川町と幡多郡大正町、十和村の3つの市町村合併によって誕生した。四万十川の下流には、同じ名称の四万十市（旧中村市）がある。人口17,363人の小さな町であるが、兵庫県の淡路島とほぼ同じ面積を有し、東から西に抜けるには車で1時間もかかる広域な自治体となった。

北ノ川小学校は、旧大正町の行政区の東の端にあったが、合併により四万十町の真ん中辺りに位置することになった。校区の中心を四万十川がゆったりと流れ、その兩岸から子どもたちが通学してくる。対岸からは、沈下橋を渡り学校にやってくる子どももいる。北ノ川小学校は、自然豊かな環境の中であり、30人ほどの子どもたちが在籍している。複式学級が1つ（5学級）、2つ（4学級）の年もあれば、完全複式（3学級）の年もあった。しかし、2018年以降は入学児童が数名になり完全に複式学級になることになっている。

<高知県の学校をめぐる状況>

各学校の教育研究の方向は、「学力向上」のための授業改善研究や教材研究に集約されている。この「学力向上」は、全国学力状況テスト（以下「学テ」）の平均点越えを目指し、さらに全国上位に位置付くことである。そのために、県教委は、県独自の学力調査（以下「県版学テ」）を冬休み明けの1月初旬に小学校4、5年生と中学校2年生に実施を強制している。点数が低ければ県教委の学力向上アドバイザーが、学校訪問をして授業視察と管理職への指導を行っている。点数が、学校評価や管理職評価、教員評価の中心を占めることとなり、自ずと「学テ」や「県版学テ」対策が横行することになってきたのがこの数年の状況である。

3学期の「県版学テ」や四月の「学テ」に向けて過去問題が繰り返され、業間や放課後の補習、冬や春休みの宿題、登校させて（ウインタースクールやスプリングスクール）の補習も普通となっている。行政からは「取り組みの報告」が義務づけられ、強制的に学力競争に追い立てられているようである。

<子どもの様子>

・6年5人（女1、男4） ・5年3人（女1、男2） *あとは口頭で。

夏、四万十川でうなぎをとろう！

1. 川で思いっきり遊ぼう！

・5・6年で総合や体育などは複式授業。5年担任は、1年目の臨時教員（男性）

川にふれあう機会はクラブの時間から始まった。探険クラブは、学校のそばを流れる四万十川の支流での川あそびを計画した。まず、この川にアクセスしやすいように川に降りる道づくりを行った。竹を切り分けながら20mぐらいを進んで、やっと川原にたどり着いた。さっそく川に飛び込んだ。「寒い」と叫びながらも初泳ぎを楽しんだ。素手で「カマツカ」という魚をつかまえる子もいた。この魚は、琵琶湖からアユの稚魚に混ざってやってきたものだった。その後は、網で魚をとったり泳ぎながら川下りをしたり活動は盛り上がっていった。

川あそびの楽しさは、下級生にも広がり一学期最後の体育は、「川で水泳をしたい」と言い出した。1～3年生は、学校近くの川で水遊びを行い。4～6年生は、「くじら山」と呼んでいる深い淵で、飛び込みに挑戦する時間をとった。

2. 「ころばし」でうなぎをとろう！

うなぎ捕りのしかけとなる「ころばし」作りを工作の時間に行った。講師は「学校の未来を考える会（開かれた学校づくり委員会）」の山口さんが引き受けて下さった。山口さんの「ころばし」は、細長い四角形の箱型になっていて、4枚の板をくぎでとめ、うなぎの入り口にプラスチックの板を斜めにつけ、もう一方にエサのミミズを入れる所とうなぎを取り出す所があった。一人一人が「マイころばし」を手にすることができた。ミミズを5～6匹入れることや入り口を下流に向けて川底につくようにすること、うなぎが通りそうな瀬につけることなどを伝授してもらった。



ミミズは、学校の花壇や茶畑、家の畑で探す子。お父さんと大きなカンタロー（シーボルトミミズ）を取った子や自分ではつかめないので男子に頼む子。それぞれが考えてミミズを確保した。

放課後、玄関に集合し例の竹やぶの近道から川に出かけた。川底を平らにして、そこに「ころばし」を仕掛けていった。

翌朝、勇んで川へ。「なんか入っちゅうぜ」「ナマズの子どもみたい」と大騒ぎ。それは、「アカザ」という口にとげのある魚だった。今度は、「あつ、逃げた」という叫び声。川の真ん中で「ころばし」のフタを開けたのだ。「うなぎはおるがや」と俄然やる気が再燃した。しかし、2回目、3回目とうなぎは姿を見せなかった。

やっと4回目にズシリとした手ごたえがあった。学校の理科室の流しに水を張り、慎重にフタを開けた途端に黒くて長いウナギがスルリと床に逃げていった。大さわぎでウナギを捕まえることになった。ついに出会えたウナギに興奮は冷めやらなかった。計測すると380g、42cmのいい型だった。

さっそく、山口さんに報告すると、氷でしめてからさばいて冷凍保存した方が良いとのことだった。先生の腕の見せ所である。氷で弱ったウナギをキリで固定して背開きにした。まな板の周りをみんなが取り囲み、興味津々で見っていた。骨を取るところになると「身がいっぱいいた」と、厳しい指摘が出る。何とかさばき終え少し先生の評価が上がったように思えた。

3. 夏休みもウナギとりに熱中！

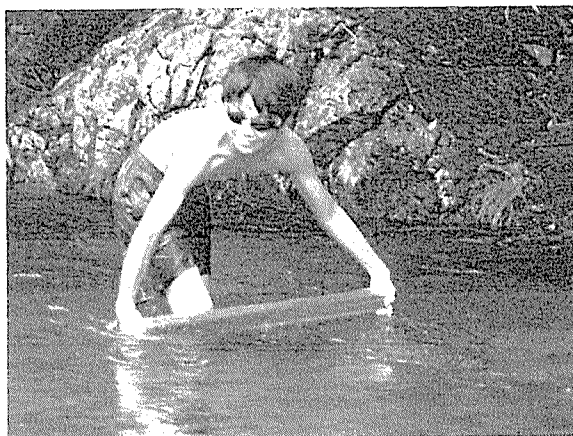
2匹目を取ろうとおじいちゃんと仕掛けにいたり、小魚をハリにつけた「ハヤナ」でウナ

ギをねらったら大きなナマズがかかったり、いろいろなアプローチが生まれていた。

夏の最後は、子どもたちの希望でお泊り合宿を学校で行った。昼間は、ボートとシーカヤックで川下りを体験した。夕食は、家族も参加して「鰻まつり」を計画した。ウナギ3匹とナマズ2匹でかば焼きを作った。小さな「うなぎ丼」になったが、みんなで分け合って楽しむことができた。

4. 地域で学びながら

鰻まつりを懐かしみつつ、絵本「うなぎのうーちゃん」を読みながら日本ウナギについての学習を重ねた。ウナギが絶滅危惧種になっていることやミミズが生態系に大きく関わっていることなど学びはつきなかった。



秋、お遍路さんの「おせったい」をしよう

6月頃、婦人会でお世話役をしている方から「秋に、岩本寺でおせったいをするので今年、北ノ川小学校の子どもたちに協力してほしい」という申し出があった。校長から相談を受けたので、「総合のふるさと学習の一環として位置付けて」参加することにした。日曜日に行いたいとのことだった。5・6年生はボランティアではなく授業日にして、月曜日を代休措置にすることにしたので、子どもたちも納得して参加することになった。しかも、お弁当付きだったので喜んだ。

1. お遍路さんのことを調べる

四万十町の中心街（旧窪川町）には、四国八十八カ所の第37番札所藤井山岩本寺がある。真言宗のお寺であり、私も檀家の一人であるが、お遍路をしたことはない。

10月8日にいくことになったが、わけのわからぬまま「おせったい」を体験することにならないようにしたかった。いくつかのキーワード（弘法大師、お遍路、1番札所など）を主にネットを使って調査をした。その中で「何で、わざわざお遍路さんはくるのだろう」「どうやって、くるのかな」「どこから、きているのかな」「旅をして楽しいことはあるのかな、つらいことはあるのかな」などの疑問が生まれた。

婦人会の方たちは、「おせったい」としてプレゼントの袋を150個用意するので、そのなかにも激励のお手紙をいれてほしいということだった。ついでに返信のハガキも入れさせてもらうことになった。

「おへんろさんごくろうさまです。私は六年生です。今、陸上記録会の練習を毎日がんばってしています。そして、今日は婦人会の方々と、ごせったいをさせていただきます。これからも気をつけて旅をつづけてがんばってください。お元気で！ 北ノ川小学校 五・六年生」

もう一つは、

「ぼくたちは、総合の勉強でおへんろさんのことを考えました。もし、よかったら、なぜ、おへんろさんをしているのかを教えてください。また、旅のよかったことや大変だったことなどを教えてください。」

という手紙とハガキ（画用紙に印刷）を入れた。切手は、150枚も用意出来ないの、相手方のご厚意に甘えることにした。

2. 緊張の当日

1時間目は学校で授業。2時間目、町が用意してくれたバスで出発。午前中は、袋詰め作業

を婦人会の皆さんと行き、早めのお弁当をいただき。昼から、お接待開始。

最初は、声も小さく。話しかけることもできずにしどろもどろ。ここは、町で育った巧（5年生の時、大きい学校から転校してきた）が、積極的に声掛けを始めて。

「おせたいをしています。」「お茶はいかがですか」だんだん、調子が出てきて。「どこから来ましたか」と尋ねるようになって、会話も進むようになっていった。徳島、愛媛、名古屋、茨木、奈良。外国の方も数人登場。次から次に「お遍路さん」がおいでるので、あっという間に袋はなくなつた。10回以上八十八カ所を巡っているという先達から、お札をいただいて大事にしていた。最後に副住職さんから、お説法をいただいて帰路に着いた。子どもたちも私もさわやかな気持ちにあふれた取り組みとなった。また、ふるさとの人気スポットを知り、人との出会いもできた貴重な体験となった。



3. 次々にお返事が届く

わざわざお返事は、いただけないだろうと子どもたちも思っていた。ところが、次々にお返事が届くことになった。1か月の間に25通のお便りが届いた。家族の健康祈願をしながら回っている方、病気の回復を願っている方、定年を迎えた記念に回っている方、心の平安と平和を求めて回っている方、家族に連れられてしょうがなく来たけど、だんだん楽しさにはまってしまった方、自分のお仕事の紹介をしてくれながら子どもたちを激励してくれる手紙など、たくさんの方の「思い」に触れることになった。人の温かさにふれる大切な出来事になった。奈良の方からは、明日香の名産の柿がダンボールで届いたときは大喜びだった。とても、おいしい柿であった。

冬、北ノ川にも戦争はあったのか？

(1) お墓を調べよう

3学期、最後の「ふるさと学習」は、1学期のヒロシマを通しての平和学習につながるものにしたかった。5年生にとっては、来年の「広島への修学旅行」につながるようにできればとも考えた。

私は、以前に四万十町の人権教育研究協議会の講演会で、満蒙開拓団に参加し命からがらに帰国した方々の壮絶な体験談を聞いたことがあった。また、当時の様子を絵に記録した資料「戦争の狂気 万山十川開拓団難民移動状況絵図 田辺末隆著」を見せてもらったことがあったので、このふるさと学習の終着点は「満蒙開拓団」にしようと考えたのである。

まず、日清、日露、日中、太平洋戦争の歴史を振り返りながら「北ノ川にも戦争があったのか」という問いを子どもたちにぶつけてみた。そして、その証拠がないか探しに行こうと提案してみた。子どもたちは、また探検が始まると思ったのか身を乗り出してきた。もし、戦争に行ってなくなった人がいれば何が残っているのかを問うと、すぐに「お墓」が出てきた。行先は、学校から歩いて5分足らずで、健人の家のすぐ上にある「曹洞宗・歓喜寺」の墓地に行くことにした。学校の東側の山は、校歌に登場する「光城址」があり、このお寺に隣接していた。実は、2学期の探検クラブで「野イチゴ」摘みに来た



時に古いお墓があることに目をつけていたので、子どもたちに見つけてほしいと思っていたのである。すぐに、1つ目のお墓が見つかった「ニューギニア」で戦死したことがわかった。光城址は、二ノ段、本丸跡が平らになって残り、栗の木が数本植えられている。地面には「野イチゴ」が群生している。周りは、杉林になっている。二ノ段の奥まったところに2つ目の古いお墓を見つけた「ビルマ」という文字が苔の中から見えたのを子どもが見つけた。城跡から学校側に降りる所にもいくつものお墓があり、真新しいお墓に満蒙開拓団でなくなった家族3人の名前を見つけた。

(2) 大正町史（合併前の町史）で調べる

この北ノ川地区から戦争に行ってなくなった人がいることは、子どもたちには驚きであった。教科書の中の戦争が現実のこととして、初めて迫ってくるようでもあった。

図書館から「大正町史」を借りてきて、戦争に関わる記述をコピーし、ゆっくり読んでいった。すると、北ノ川地区から49人の戦死者がいること。旧大正町では200人の戦死者がいることが読み取れた。

そして、昭和の初めに戦争に行った兵士を迎える「凱旋門」を北ノ川地区の3カ所（船戸越、鳥打場、地蔵峠）に設置し、戦後その「凱旋門」を北ノ川小学校の正門に移したということだった。子どもたちは、「えー、あの柱」かなと、今は隣の北ノ川中学校（校庭をはさんで建っている）の正門になっている2つの大きな石柱を見に行った。今まで、読んだこともなかった石柱に刻まれた文字をたどると右には「村醫 武内政衛 寄附」と、左側には「昭和五年十月建立」と刻まれていた。たまたま、昭和28年入学の方々が喜寿の記念に植樹をするために校庭で作業しているときがあったので尋ねてみると、「わたしが、入ったときには、もうちょっと上の道路のそばにあったよ」と教えてくれた。しかし、「凱旋門」なのかどうかは定かではなかった。

(3) 正門は、「戦争遺跡」だったのか

凱旋門が置かれた「鳥打場」は、打井川地区にあり、山道だが県道になっていて四万十市に出かけるときには通っていることを子どもたちが教えてくれた。

「地蔵峠」は、同じ打井川地区の一番奥に住む光の家の裏手にあることを光のお母さんが教えてくれた。海の方へ抜ける近道だったそうである。（四万十川は河口からいったん内陸に向かって入るのだが、途中で大きく蛇行して上流部では海に近づいているので、山越えて海に出た方が便利だったのだと思われる）1時間ほど歩いていけるというので、休みの日に行こうということになった。「船戸越」については、よくわからなかった。

そこで、月に1度読み聞かせに来てくれる「文治さん」のことが浮かんできた。文治さんは、元役場の職員で、しかも「地名」の研究をしていると聞いていたので、電話で相談をしてみることにした。文治さんは、3日目に新しい情報を持ってきてくれた。「船戸は船の着くところでそこを越える峠のことではないか」ということだった。学校前の国道を1キロほど行ったところに昔の町との境があり、今はトンネルでつながっているが、その上の旧道の峠ではないかということだった。そして、門の石柱は「古い大正町史」に記録があったということだった。「村の医者が寄付したこと」「その医者は、とても流行っていたが腕はあまりよくなかった」ということが書かれていた。多分、「凱旋門」に間違いはないだろうということ



だった。最後に拓本に子どもたちと挑戦したが、表面がガタガタだったせいかな、うまくいかなかった。

(4) 満蒙開拓団の悲惨な歴史

人権教で借りた絵は、当時の様子がていねいにリアルに描かれているので、十分に当時の悲惨な状況が子どもたちに伝わっていた。旧大正町、旧十和村、さらに下流の旧西土佐村（現在、四万十市）などから、数百名の満蒙開拓団が編成されていた。先発隊が昭和19年ごろに入り、本体が入植したのは昭和20年の3月頃だということだった。すぐに、戦局は悪化し、満州からの逃避行の中に置かれたことがわかった。戦争に行くことを免除されるという約束は守られなかったために、戦争に行き行方不明になった人がいたこと。小さい子どもたちが次々に犠牲になったり、親と離れて残されたり、売られていく子どもがいたことなど、胸に迫ることがたくさん描かれていた。子どもたちは、静かに真剣に見入っていた。

まとめにかえて

ふるさとが子どもたちのなかに少しでも刻まれることを願って、地域に飛び出したとりくみであった。保護者からは、「先生が、一番楽しんだんじゃない。」と言われたが、先生が楽しくなければ、子どもたちも楽しいはずがないと思う。ふるさとは、何もないかもしれないが、「かわらないものが、あることも」また、大切なことであることを伝えたかったのである。

資料…四万十町人権教育研究会大正支部での発表作文（北ノ川小学校6年男子）

北ノ川で体験したこと

「みなさんは、高知県や四万十町のことが好きですか？」

ぼくは、「好きではない」と答えたことがあります。それは、何にもないと思ったからです。「何にもないき、ええがやろう。」と言う人もいます。でも、ぼくは、「公園や遊ぶところがすくないき、やっぱりつまらない」と思いました。そんなぼくの考えは、少しずつ変わっていききました。そうやっていった理由の一つに、四万十川での体験があります。

四万十川の学習は、総合の時間やクラブの時間に行い。六月には、学校から川までの近道を作りました。先生とみんなでやぶを切り開いたり、のこぎりで竹を切ったりして、小さな道を作り、やっと川にたどり着いたときには、残りの時間は十五分しかありませんでした。水は冷たかったけれどぼくたちは、すぐに川の中に入り、思いっきり泳ぎました。先生が、「魚をとってこい。」と言ったので、(そんなの無理)と思ったけど、挑戦しました。

川の中で魚はじっとしていたので、チャンスと思ってさっと上から手をかぶせると、魚はびちびちと手の中ではねました。うまくつかまえることができ、びっくりしたと同時にすごくうれしくなりました。

七月には、「クジラ山」と呼んでいる深いふちが、あるところに行きました。ぼくの背の三倍ぐらいの深さがあり、周りの岩からとび込むことができる、お気に入りの場所です。ぼくたちは、繰り返しとびこみ、「くじら山」には、みんなの声が響いていました。暑い日だったので、とても気持ちよく、夢中になって遊びました。

次に「うなぎを取ってみよう」ということになり、「ころばし」作りに取り組みました。「ころばし」とは、うなぎを取るしかけの一つです。民宿「かわせみ」の吉良さんのところへ行って教えてもらいました。

吉良さんの「ころばし」は、細長い箱筒になっていて、えさを入れるところには、小さい穴があり、そこからえさのにおいが出ていくようになっていました。うなぎが中に入っていくと、出られないようになっています。(工夫しているなあ)と思いました。ぼくたちは、一つ一つ教

えてもらいながら、自分用の「ころばし」を完成させました。

その「ころばし」をわきに抱え、わくわくしながら、川に向かいました。いよいよ、うなぎ取りです。うなぎが入るところを川下にして、「ころばし」を置きました。「ころばし」の上には、石をかぶせ、入り口が浮かないようにしてかくしていきます。川底にぴったりとつくよう、一つ一つ石を取っては、そっと置いていきました。明日の朝が楽しみでした。

次の日、急いで「ころばし」をあげに行ったけど、うなぎはぜんぜんとれていません。悔しくて今度こそという気持ちになりました。

うなぎのえさになるみみずは、茶畑の下や畑を掘ってとってきました。すぐには見つけることができず、大変でした。驚いたことに、「ころばし」の中に入れたミミズは、一晩おいても生きていたので、いったん土にもどして、再利用することにしました。

しかし、うなぎはなかなか取れず、ぼくたちのやる気はうせていきました。やっと学校下の相去川のしかけに、うなぎが入っているのが分かったときは、うれしくなりました。うなぎを取り出そうと、すぐにふたを開けたので、にげられてしまい、「ああっ」という声が出ました。でも、ぼくたちは、うなぎが取れることが分かって、がぜんやる気がわいてきました。

「くじら山」の下手にもしかけました。五回目の挑戦でした。(今度こそ)、そう思いながら「ころばし」を引き上げると、ズシリとした手ごたえがありました。(やった)と思いました。

今度は、慎重に学校まで運んで、家庭室でふたを開けました。中から、真っ黒い色をしたうなぎが出てきました。うなぎは元気で、あばれて逃げようとしていました。教室のいろんなところが、ヌルヌルになりました。重さは三百八十グラムで、長さ四十二センチでした。(いい型のうなぎだ)と思いました。

自信たっぷりに料理をしてくれた先生でしたが、うなぎの骨には身がいっぱいついていました。そのうなぎは、食べずに冷凍室に入れました。

一学期の最後には、四万十川の方まで行きました。石がゴロゴロしていて、川の流れも速く難しかったのですが、なんとかしかけることができました。少し小型でしたが、一匹だけ取ることができました。夏休みには、「うなぎまつりをしよう」ということになりました。

そこで、別の仕掛けも教えてもらいました。ハリスの先にうなぎ張りをつけた「ハヤナ」というしかけです。うなぎばりには、えさのハヤをつけ、このしかけを「くじら山」の周辺に六本つけました。

次の日の朝、「かかっていますように」と願いながらしかけを上げていきました。三本はだめでしたが、一本には、大きなハヤがかかっていました。残りの二本は、ひっぱっても動きませんでした。先生に頼んでもぐって見てもらいました。すると、でっかいナマズが二匹かかかって、びっくりしました。なんとか、ひっぱりだすことに成功しました。ナマズは、家でお父さんにりょうってもらい、から揚げにしました。お父さんは、「これは、うまい。なまずはいけるねー。」と。ナマズは、臭みがなく、すごくおいしかったです。

こうして夏の終わりには、「うなぎまつり」を行うことができました。家族も呼んでみんなで分け合ったので、小さな切れのうなぎ井になりました。でも、ぼくにとっては、おいしい一杯となりました。

「高知県や四万十町のことが好きですか。」

今、そう聞かれたら、ぼくは以前のような答え方はしないと思います。それは、これまで体験したことが、楽しい思い出の一つになって、心に残っているからです。知らず知らずのうちに夢中になってやっていたことが忘れられないからです。

ぼくは、これからもいろんな魅力に気づいていきたいと思っています。